

デーヴォ ガイド



2024.4.29-5.5

But **grow** in the grace and knowledge of our Lord and Savior Jesus Christ. To him be glory both now and forever! Amen. II Peter 3:18

L T G ガイド

- ①お互いへの感謝と誉めることを分かち合いましょう。(2~3つ)
- ②1週間の罪を言い表して悔い改め、互いに祈りましょう。
- ③礼拝メッセージの分かち合いをします。
礼拝メッセージの分かち合いが難しい場合はディポジションの分かち合い(なるべく短く)
- ④預言の祈り(主の御心を宣言して祈り)をします。

L T G Guide

セル ガイド

- ①祈り、賛美によって主がここにいてくださることを信じ、聖霊様があがめます。
- ②互いの存在を感謝し、尊敬するところを分かち合いましょう。
- ③ディポジションの分かち合いをします。
- ④セルの目的と働きについてみなで共有して、祈り、遣わされて行きましょう。

家族礼拝ガイド

年長のクリスチャンがリードしてください。進め方にはいろいろな意見が出るかもしれませんが、「主に期待する」信仰が最も大切です。いつもの家族でいいのです。

- ①この1週間で神様はすばらしいと感じたのはどんなこと?
- ②この1週間でお互いにどんなことを感謝しますか?(または誉めたいですか?)1つだけ。
- ③聖書のみことばから、どんな実践をして、またどんな恵みがありましたか?
- ④互いの必要のために祈りましょう。

Cell Group Guide

礼拝メッセージフィードバック

<今日の聖書箇所は…>

①神のみこころは?(信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど)

②どんな思いになりましたか?(感情や願いなど)

③生き方にどう適用しますか?(あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか?)

④この世にあって何を実践しますか?

Family Worship



11:14 こうして【主】は、ソロモンに敵対する者としてエドム人ハダドを起こされた。彼はエドムの王の子孫であった。

11:15 ダビデがかつてエドムにいたころ、軍の長ヨアブが戦死者を葬りに上って行き、エドムの男子をみな打ち殺したことがあった。

11:16 ヨアブは全イスラエルとともに六か月の間そこにとどまり、エドムの男子をみな絶ち滅ぼしたのである。

11:17 しかしそのとき、ハダドは、彼の父のしもべである数人のエドム人と逃げてエジプトへ行った。当時、ハダドは少年であった。

11:18 彼らはミディアンを出発してパランまで行き、パランから何人かの従者を従えてエジプトへ、エジプトの王ファラオのところへ行った。するとファラオは彼に家を与え、食糧を支給し、さらに土地も与えた。

11:19 ハダドはファラオにこのほか気に入られ、ファラオは自分の妻の妹、王妃タフペネスの妹を彼に妻として与えた。

11:20 タフペネスの妹は、彼に男の子ゲヌバテを産んだ。タフペネスはその子をファラオの宮殿で育てた。ゲヌバテは、ファラオの宮殿でファラオの子どもたちと一緒にいた。

11:21 ハダドは、ダビデが先祖とともに眠りについたこと、また軍の長ヨアブも死んだことを、エジプトで聞いた。そこでハダドがファラオに「私を国へ帰らせてください」と言うと、

11:22 ファラオは彼に言った。「おまえは、私に何か不満があるのか。自分の国へ帰ることを求めるとは。」するとハダドは、「違います。ただ、とにかく私を帰らせてください」と答えたのである。

11:23 神はまた、ソロモンに敵対する者として、エリヤダの子レズンを起こされた。彼は、自分の主人、ツォバの王ハダドエゼルのもとから逃亡した者であった。

11:24 ダビデがハダドエゼルの兵士たちを殺害した後、レズンは人々を自分のところに集め、略奪隊の隊長となった。彼らはダマスコに行ってそこに住み、ダマスコを支配した。

11:25 彼は、ソロモンが活着している間、ハダドのように悪を行ってイスラエルに敵対し、イスラエルを憎んだ。こうして彼はアラムを支配した。

栄華を極め王国を築いたソロモンは、誰の目にも安泰に見えたことでしょう。しかし人には見えないところに様々な敵や問題が隠れているものです。ハダドやレズンもまた同じです。彼らの敵対はソロモンに原因があるわけではありませんが、しかし彼の大きな妨げとなるのです。

ソロモンは初めは自分の王としての使命の重大さに、謙遜に力不足を認めて、主から知恵を求めて主に従いましたが、安心するとだんだん主から離れてしまいました。これはクリスチャンの陥りやすい罠です。しかし忘れてはならないことは、決して神様を忘れても良いほどの安心などはこの世にないということです。

ソロモンでさえ、見えない問題が存在したのです。私たちは見かけのまたはつかの間に安心によって神様を忘れないようにしましょう。今は気付いていなくても、この先障害になるような問題はいくらでもあるのだと認識しましょう。祝福されているときでも、主が必要だとへりくだりましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



30日 火曜

列王 I



11:26 ツェレダ出身のエフライム人、ネバテの子ヤロブアムはソロモンの家来であった。彼の母の名はツェルアといい、やもめであった。ところが彼も王に反逆した。
11:27 彼が王に反逆するようになった事情はこうである。ソロモンはミロを建て、彼の父ダビデの町の破れ口をふさいでいた。
11:28 ヤロブアムは手腕家であった。ソロモンはこの若者の働きぶりを見て、ヨセフの家のすべての役務を管理させた。
11:29 そのころ、ヤロブアムがエルサレムから出て来てと、シロ人で預言者であるアヒヤが道で彼に会った。アヒヤは新しい外套を着ていた。彼ら二人だけが野にいた。
11:30 アヒヤは着ていた新しい外套をつかみ、それを十二切れに引き裂き、
11:31 ヤロブアムに言った。「十切れを取りなさい。イスラエルの神、【主】はこう言われる。『見よ。わたしはソロモンの手から王国を引き裂き、十部族をあなたに与える。』
11:32 ただし、ソロモンには一つの部族だけ残る。それは、わたしのしもベダビデと、わたしがイスラエルの全部族の中から選んだ都エルサレムに免じてのことである。
11:33 というのは、人々がわたしを捨て、シドン人の女神アシュタロテや、モアブの神ケモシュや、アンモン人の神ミルコムを拝み、父ダビデのように、わたしの目にかなうことを行わず、わたしの掟と定めを守らず、わたしの道に歩まなかったからである。
11:34 しかし、わたしはソロモンの手から王国のすべてを取り上げることはいらない。わたしが選び、わたしの命令と掟を守った、わた

しのしもベダビデに免じて、ソロモンが生きている間は、彼を君主としておく。
11:35 わたしは彼の子の手から王位を取り上げ、十部族をあなたに与える。
11:36 彼の子には一つの部族を与える。それは、わたしの名を置くために選んだ都エルサレムで、わたしのしもベダビデが、わたしの前にいつも一つのとしびを保つためである。
11:37 わたしがあなたを召したなら、あなたは自分の望むとおりに王となり、イスラエルを治める王とならなければならない。
11:38 もし、わたしが命じるすべてのことにあなたが聞き従い、わたしの道に歩み、わたしのしもベダビデが行ったように、わたしの掟と命令を守って、わたしの目にかなうことを行うなら、わたしはあなたとともにいて、わたしがダビデのために建てたように、確かな家をあなたのために建て、イスラエルをあなたに与える。
11:39 このために、わたしはダビデの子孫を苦しめる。しかし、それを永久に続けはしない。』」
11:40 ソロモンはヤロブアムを殺そうとしたが、ヤロブアムは立ち去ってエジプトに逃れ、エジプトの王シシャクのもとに行き、ソロモンが死ぬまでエジプトにいた。
11:41 ソロモンについてのその他の事柄、彼が行ったすべてのこと、および彼の知恵、それは『ソロモンの事績の書』に確かに記されている。
11:42 ソロモンがエルサレムで全イスラエルの王であった期間は、四十年であった。
11:43 ソロモンは先祖とともに眠りにつき、父ダビデの町に葬られた。彼の子レハブア

ムが代わって王となった。

ソロモンは多くの異教女性を側室とてい持ちました。そして彼女らの影響で、またはその出身の国々との関係維持のために、邪教を取り入れてしまいました。つまり「(神を)捨て、…(邪教)を拝み、…(神の)道に歩まなかった」ので、王国は反逆者によって分裂したのです。

ソロモンのようにかつては敬虔な祈りによる証と実績があっても、今現在主に背いては、それらは無になってしまいます。異教世界との関係維持という言い訳なら、ソロモンと一緒です。今、主に従いましょう。

①神のみこころは？(信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど)

②どんな思いになりましたか？(感情や願いなど)

③生き方にどう適用しますか？(あなたその部分の主は扱おうとしておられますか)

④この世にあって何を実践しますか？



1日 水曜

列王 I



12:1 レハバムはシェケムに行った。全イスラエルが彼を王とするために、シェケムに来ていたからである。

12:2 ネバテの子ヤロバムは、まだソロモン王の顔を避けてエジプトに逃れていた間に、レハバムのことを聞いた。そのとき、ヤロバムはエジプトに住んでいた。

12:3 人々は使者を遣わして、彼を呼び寄せた。ヤロバムは、イスラエルの全会衆とともにレハバムのところに来て言った。

12:4 「あなたの父上は、私たちのくびきを重くしました。今、あなたは、父上が私たちに負わせた過酷な労働と重いくびきを軽くしてください。そうすれば、私たちはあなたに仕えます。」

12:5 するとレハバムは彼らに、「行け。三日たったら私のところに戻って来るがよい」と言った。そこで民は出て行った。

12:6 レハバム王は、父ソロモンが生きている間ソロモンに仕えていた長老たちに、「この民にどう返答したらよいと思うか」と相談した。

12:7 彼らは王に答えた。「今日、もしあなたがこの民のしもべとなって彼らに仕え、彼らに答えて親切なことをかけてやるなら、彼らはいつまでも、あなたのしもべとなるでしょう。」

12:8 しかし、王はこの長老たちが与えた助言を退け、自分とともに育ち、自分に仕えている若者たちにこう相談した。

12:9 「この民に何と返答したらよいと思うか。私に『あなたの父上が私たちに負わせたくびきを軽くしてください』と言ってきたのだ

が。」

12:10 彼とともに育った若者たちは答えた。

「『あなたの父上は私たちのくびきを重くしました。けれども、あなたはそれを軽くしてください』と言ってきたこの民には、こう答えたらよいでしょう。彼らにこう言いなさい。『私の小指は父の腰よりも太い。

12:11 私の父がおまえたちに重いくびきを負わせたのであれば、私はおまえたちのくびきをもっと重くする。私の父がおまえたちをむちで懲らしめたのであれば、私はサソリでおまえたちを懲らしめる』と。」

事業家としては成功しても、信仰的には神から離れてしまったソロモンのもて、その国は見えないところで混乱の兆しがありました。権力をものにしようとする者たちと、それに追随する者たちです。

それでもソロモンが神に従っているなら、憐れみもあって解決をいただけたかもしれません。しかし今は、主は始めの約束と警告の通りにソロモンから離れてしまわれたのです。

レハバムは父ダビデの権威を表面的にしか見ず、また権威というものを民への圧制と誤解しました。そしてソロモンの家臣である長老たちの進言を無視したのです。

恵を次世代まで残すには、何よりも主への服従を見せることが必要です。今は良くても、近い将来に混乱の要因はいっぱいあります。ソロモンはその点で失敗しました。このことを戒めとして受け止めましょう。次世代、後輩、子孫に信仰を残して、恵を渡しましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



2日 木曜

列王 I



12:12 ヤロブアムとすべての民は、三日目にレハブアムのところに来た。王が「三日目に私のところに戻って来るがよい」と命じたからである。

12:13 王は民に厳しく答え、長老たちが彼に与えた助言を退け、

12:14 若者たちの助言どおりに彼らに答えた。「私の父がおまえたちのくびきを重くしたのなら、私はおまえたちのくびきをもっと重くする。私の父がおまえたちをむちで懲らしめたのなら、私はサソリでおまえたちを懲らしめる。」

12:15 王は民の願いを聞き入れなかった。かつて【主】がシロ人アヒヤを通してネバテの子ヤロブアムにお告げになった約束を実現しようと、【主】がそう仕向けられたからである。

12:16 全イスラエルは、王が自分たちに耳を貸さないのを見てとった。そこで、民は王にことばを返した。「ダビデのうちには、われわれのためのどんな割り当て地があろうか。エッサイの子のうちには、われわれのためのゆずりの地はない。イスラエルよ、自分たちの天幕に帰れ。ダビデよ、今、あなたの家を見よ。」イスラエルは自分たちの天幕に帰って行った。

12:17 ただし、ユダの町々に住んでいるイスラエルの子らにとっては、レハブアムがその王であった。

12:18 レハブアム王は役務長官アドラムを遣わしたが、全イスラエルは彼を石で打ち殺した。レハブアム王はやつとの思いで戦車に乗り込み、エルサレムに逃げた。

12:19 このようにして、イスラエルはダビデの家に背いた。今日もそうである。

12:20 全イスラエルは、ヤロブアムが戻って来たことを聞いたので、人を遣わして彼を会衆のところに招き、彼を全イスラエルの王とした。ユダの部族以外には、ダビデの家に従う者はいなかった。

レハブアムはソロモンの子でしたが、アモン人の女性との子です。すなわち異教の母のもとに育ち、異教を身に着けた人であったのです。そのような王が神様に従って信仰的は統治をするはずはなく、彼は苦役を逃れたいと嘆願する民に、「くびきをもって重くする。」と、無慈悲な態度で答えました。

これが王国分裂の直接の原因となり、もはや「ユダ部族以外には、ダビデの家に従う者はいなかった」という、王国の分裂を招いたのです。ソロモンにも問題がありましたが、彼の子であるレハブアムも、父がなぜ成功したのか、その恵がどこから来たのかを、謙遜になって知るべきでした。悪いところだけを見習ってしまったようです。

聖書はソロモンの残したことばにも、神様のところが表されているとして、聖典となっているものがあります。私たちは人の信仰の良いところに目を留めて、そこから主が語られることを聞くべきです。悪いところを指摘するだけでは無益です。または悪いところを都合よく見做ってしまうのも神の御心ではありません。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



3日 金曜

列王 I

12:21 レハバームはエルサレムに帰り、ユダの全家とベニヤミンの部族から選り抜きの戦士十八万を召集し、王位をソロモンの子レハバームのもとに取り戻すため、イスラエルの家と戦おうとした。

12:22 すると、神の人シエマヤに次のような神のことばがあった。

12:23 「ユダの王、ソロモンの子レハバーム、ユダとベニヤミンの全家、およびそのほかの民に告げよ。

12:24 『【主】はこう言われる。上って行ってはならない。あなたがたの兄弟であるイスラエルの人々と戦ってはならない。それぞれ自分の家に帰れ。わたしが、こうなるように仕向けたのだから。』」そこで、彼らは【主】のことばに聞き従い、【主】のことばのとおりに戻って行った。

12:25 ヤロブアムはエフライムの山地にシェケムを築き直し、そこに住んだ。さらに、彼はそこから出て、ペヌエルを築き直した。

12:26 ヤロブアムは心に思った。「今のままなら、この王国はダビデの家に帰るだろう。

12:27 この民が、エルサレムにある【主】の宮でいけにえを献げるために上ることになっているなら、この民の心は彼らの主君、ユダの王レハバームに再び帰り、彼らは私を殺して、ユダの王レハバームのもとに帰るだろう。」

12:28 そこで王は相談して金の子牛を二つ造り、彼らに言った。「もうエルサレムに上る必要はない。イスラエルよ。ここに、あなたをエジプトから連れ上った、あなたの神々がおられる。」



12:29 それから彼は一つをベテルに据え、もう一つをダンに置いた。

12:30 このことは罪となった。民はこの一つを礼拝するためダンまで行った。

12:31 それから彼は高き所の宮を造り、レビの子孫でない一般の民の中から祭司を任命した。

12:32 そのうえ、ヤロブアムはユダにある祭りに倣って、祭りの日を第八の月の十五日と定め、祭壇でささげ物を献げた。こうして彼は、ベテルで自分が造った子牛にいけにえを献げた。また、彼が造った高き所の祭司たちをベテルに常駐させた。

12:33 彼は、自分で勝手に考え出した月である第八の月の十五日に、ベテルに造った祭壇でいけにえを献げた。このように、彼はイスラエルの人々のために祭りの日を定め、祭壇でいけにえを献げ、香をたいた。

ユダの王国（南王国）に関して言えば、その王であるレハバームは神に従わない人でありましたが、民は預言者のことばを聞いて、分裂した一方の同胞たる「兄弟であるイスラエルと」戦いませんでした。

一方分裂した片方のイスラエル（北王国）はどうかというと、その王ヤロブアムによって神様を無視して金の子牛という偶像まで作って、さまざまに主に逆らいました。これがイスラエルの不信仰を助長し、最後にはアッシリアに滅ぼされるに至ったのです。

ヤロブアムの考えにも一理あり、それは求心力を保つための政治的な手腕であったようです。しかし、何事も神様のみこころに反しては成り立たないのが現実です。そのときは成功しているかのように見えても、水面下で破綻への動きは加速し、霊的な崩壊が始まり、気が付いたときには修復不可能な状態になっているのです。

自分ではうまい判断をしているようでも、神様

のみこころに反していないか、自分の言動についても考えてみましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



4日 土曜

列王 I



13:1 一人の神の人が、【主】の命令によってユダからベテルにやって来た。ちょうどそのとき、ヤロブアムは香をたくために祭壇のそばに立っていた。

13:2 すると、この人は【主】の命令によって祭壇に向かい、これに呼びかけて言った。「祭壇よ、祭壇よ、【主】はこう言われる。『見よ、一人の男の子がダビデの家に生まれる。その名はヨシヤ。彼は、おまえの上で香をたく高き所の祭司たちを、いけにえとしておまえの上に献げ、人の骨がおまえの上で焼かれる。』」

13:3 その日、彼は一つのしるしを与えて、次のように言った。「これが【主】の告げられたしるしである。見よ、祭壇は裂け、その上の灰はこぼれ出る。」

13:4 ヤロブアム王は、ベテルの祭壇に向かって叫んでいる神の人のことばを聞いたとき、祭壇から手を伸ばして「彼を捕らえよ」と言った。すると、彼に向けて伸ばしていた手はしなび、戻すことができなくなった。

13:5 神の人が【主】のことばによって与えたしるしのおり、祭壇は裂け、灰は祭壇からこぼれ出た。

13:6 そこで、王はこの神の人に向かって言った。「どうか、あなたの神、【主】にお願いして、私のために祈ってください。そうすれば、私の手は元に戻るでしょう。」神の人が【主】に願ったので、王の手は元に戻り、前と同じようになった。

13:7 王は神の人に言った。「私と一緒に宮殿に来て、食事をして元気をつけてください。あなたに贈り物をしたいのです。」

13:8 すると神の人は王に言った。「たとえ、あなたの宮殿の半分を私に下さっても、私はあなたと一緒に参りません。また、この場所ではパンも食わず、水も飲みません。

13:9 というのは、【主】のことばによって、『パンを食べてはならない。水も飲んでではない。また、もと来た道を通って帰ってはならない』と命じられているからです。」

13:10 こうして、彼はベテルに来たときの道は通らず、ほかの道を通って帰った。

ヤロブアムの行為、すなわち勝手な祭壇と礼拝が神に反逆するのであることが、ここでは明かにされました。これによって神様の律法と預言とは、生きて権威があるものだということが明確になりました。

それにはこの「神の人」がその使命を果たしたのです。彼は王に捕えられそうになり、危険を犯してでも、主のみこころを告げずにはいられませんでした。彼は無名でしたが、その働きに主は、ヤロブアムの「手はしなび…」というわざによって答え、そこに権威を表してくださいました。

私たちにとっても、よき働きに必要なのは、有名であるか評価されるかといったことではなく、主のみわざです。そのためには自分のことを犠牲にしても主のために、主のみこころがなるために…という価値観が大切です。

またヤロブアム王の招きに応じていたら、歓迎されて良い目を見たかもしれませんが、それには目もくれずに、主の警戒に従いました。自分を喜ばすよりも主に従う者となりたいものです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？





13:11 一人の年老いた預言者がベテルに住んでいた。その息子たちが来て、その日、ベテルで神の人がしたことを残らず彼に話した。また、彼らは、この人が王に告げたことばも父に話した。

13:12 すると父は「その人はどの道を行ったか」と彼らに尋ねた。息子たちは、ユダから来た神の人が行った道を知っていた。

13:13 父は息子たちに「ろばに鞍を置いてくれ」と言った。彼らがろばに鞍を置くと、父はろばに乗り、

13:14 神の人の後を追って行った。そして、その人が樅の木の下に座っているのを見つけると、「ユダからおいでになった神の人はあなたですか」と尋ねた。その人は「私です」と答えた。

13:15 彼はその人に「私と一緒に家に来て、パンを食べてください」と言った。

13:16 するとその人は言った。「私は、あなたと一緒に引き返して、あなたと一緒に行くことはできません。また、この場所では、あなたと一緒にパンも食わず、水も飲みません。

13:17 というのは、私は【主】のことばによって、『そこではパンを食べてはならない。水も飲んではならない。もと来た道を通って帰ってはならない』と言われているからです。」

13:18 彼はその人に言った。「私もあなたと同じく預言者です。御使いが【主】のことばを受けて、私に『その人をあなたの家に連れ帰り、パンを食わせ、水を飲ませよ』と告げました。」こうして彼はその人をだました。

13:19 そこで、その人は彼と一緒に帰り、

彼の家でパンを食べ、水を飲んだ。

13:20 彼らが食卓に着いていたとき、その人を連れ戻した預言者に【主】のことばがあったので、

13:21 彼は、ユダから来た神の人に呼びかけて言った。「【主】はこう言われる。『あなたは【主】のことばに背き、あなたの神、【主】が命じた命令を守らず、

13:22 引き返して、主があなたに、パンを食べてはならない、水も飲んではならないと言った場所でパンを食べ、水を飲んだので、あなたの亡骸は、あなたの先祖の墓には入らない。』」

13:23 彼はパンを食べ、水を飲んだ後、彼が連れ帰った預言者のために、ろばに鞍を置いた。

13:24 その人が出て行くと、獅子が道でその人に会い、その人を殺した。死体は道に放り出され、ろばは、そのそばに立っていた。獅子も死体のそばに立っていた。

10節までの「神の人」はすばらしい預言者でしたが、ここで彼は失敗を犯します。偽物とも思えるような預言者が彼を「だまし」て、神様の命令に背かせ、この「神の人」は獅子に殺されたのです。

彼にどんな落ち度があったのでしょうか。神様が「そこではパンを食べてはならない」と命じられたのには理由があります。彼はヤロブアムとイスラエルの反逆を厳然と非難しなくてはなりませんでしたが、この地で誰かと食事をするとということとは親しい交わりをすることを意味します。そこからこの「神の人」の預言活動が、妥協的なものになってゆくことを神様は見抜いておられたのです。妥協は偶像礼拝の入り口です。

またこの「年寄りの預言者」は、ヤロブアムの反逆にも意義を唱えることなく、保身のためか預

言者として王の罪を容認していました。彼は自分のために「神の人」から、今後の身の振り方のために情報を得たかっただと思われまます。そのような人とまるで一致しているかのような言動は、真の預言者としては許されないことだったのです。

皮肉にも「年寄りの預言者」が本当に預言したのは、「神の人」のさばかれることでした。ここに神様の主権が表されます。最後まで主に従いましょう。人間関係の妥協よりもみこころを選び取りましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

